

に医療を行い、人を殺し、女性に近づき、報酬をむさぼっていることを戒めている。遊行を止めた時衆が渡世のために売薬・鍼治・墮胎に従事しており、また南北朝から室町末にかけての軍記物などには、臨濟宗・南都（法相／華嚴）・時宗の陣僧が「金創を療治し（洗浄・縫合・止血・気付薬・服薬）、死骸を治め、最期の十念を授け、無聊を慰め」る活躍もみられた。

近世初期、遊行を止め教団を形成した時宗は僧の健康管理に大きな関心を寄せ、そのため積極的

に医療を利用するようになる（清規『東西作用抄』）。また幕府の寺院法度にもとづいて僧に対する生活規制が強まり、寺請（檀家）制度によって僧の生活が安定化すると、医療に従事する僧はみられなくなる。寺では祈療を盛んに行い、生き仏である遊行上人による回国では、賦算（南無阿弥陀仏の名号を記した札を配る）・治病のための加持祈祷・御守りの配布がなされるようになった（『藤沢山日鑑』）。

（平成28年4月例会）

## 新刊『米沢藩医 堀内家文書 ——解題篇・図版篇——』から何が読みとれるか

片桐 一男

### I 堀内文書との出会い

昭和44（1969）年10月28日（火）

午後、順天堂大学小川研究室で堀内淳一氏より杉田玄白はか関係文書を見る。

翌29日（水）酒井シヅ氏と堀内文書の調査・整理を開始（目録作成作業開始）。

同12月16日（火）

午後、小川研究室で堀内家の軸物を見る。

昭和45（1970）年1月29日

「江戸時代後半の蘭方医術の発展についての研究」開始、メンバーは小川鼎三、大鳥蘭三郎・大塚恭男・堀内淳一・酒井シヅ・片桐一男。

同3月11日（水）より調査研究会（文書解読会）開始。

同3月23日（月）『日本経済新聞』に「ペールを脱いだ蘭学社会」の紹介記事掲載される。

1971年、1972年の2ヶ年、上記研究班は文部省科学研究費の支給を受けた。

・研究成果は次の通り。

「特集堀内家文書の研究」（『日本医史学雑誌』第18巻第1号1972年3月）所収。

小川鼎三「堀内文書にみる蘭学者の生活と思想——第一回杉田玄白の手紙から——」

大鳥蘭三郎「堀内文書にみられるオランダ語について」

堀内淳一「米沢藩々医、堀内家とその周辺」

大塚恭男「堀内文書よりみた江戸時代後期の医療（第一報）」

酒井シヅ「堀内文書関係年譜」

・堀内文書解読の成果は次の通り。

片桐一男「堀内文書目録稿」（『日本医史学雑誌』第16巻第3号1970年9月）

片桐一男「堀内文書の研究1-11」（『日本医史学雑誌』第16巻第4号～第23巻第4号 1970年12月～1977年10月）堀内文書の約半数を解読掲載。

### II 米沢市医師会との契約

堀内淳一医博が堀内家文書の全体を米沢市に寄贈されたことをうけて、米沢市医師会に残る約半数の文書の解読・注記・解説による公刊事業を計画され、筆者に委託された。平成23年7月1日付で「資料解読業務委託契約書」に調印。

納入期限は平成26年2月末日であったが、平成25年12月26日付で完稿納入。

編集は米沢市立上杉博物館と共同で進行。平成

27年3月27日付出版、ただし、製本上の不具合が生じ、実際の刊行は6月に至って、『伝播する蘭学』刊行より後になってしまった。

事業終了に伴って、収集してきた堀内家文書関連資料一切を米沢市に寄贈して終えることができた。

### Ⅲ 注目の諸点

#### 1 『幼幼精義』の原書確定

長い間、フーフェランドの独語原典、サクセ蘭訳本原書、サクセの名前、原書和訳箇所未詳であった。

- ・独語文から直接和訳と誤り（富士川游『日本医学史』1941）。
- ・原書の取り違い（内山孝一『明治前日本生理学史』1955. ではインヒリディオ・メディウム・1836刊として誤認）。
- ・蘭訳者は薩窟説とあるが、フルネームのスペリングも書名も不明。（深瀬泰旦『洋楽史事典』）。
- ・堀内素堂の原本とした蘭訳者名はJAN ADRIAAN SAXE 蘭訳原本著名は『米沢藩医堀内家文書』と『伝播する蘭学』参照。
- ・素堂の重訳箇所も上記二書を参照。
- ・江戸の蘭学界から絶賛を以て迎えられた。代価も判明。出版事情も判明。

#### 2 米沢藩医師の遊学

米沢藩の「先祖書」「勤書」から確定、遊学先の追究から上杉鷹山の奨励策を解明。

#### 3 杉田玄白の公害論

堀内忠意（林哲）と杉田玄白の往復書翰の解読・分析から解明。注目の初期公害論。

#### 4 漢方医と蘭方医の診断

鷹山の実父秋月長門守種美の治療をめぐる西良仲と堀内易庵の診断の相違、対立。

#### 5 痘瘡医 津江栢寿

米沢藩招聘の津江栢寿の業績・足跡。書翰13通から、初の解明。

#### 6 「代葉」

蘭方医の、高価なオランダ薬にかわる国産「代葉」の探索は、今日の新薬開発と共通する国益問題。

#### 7 鷹山の膝痛、治広の足痛

蘭方医の診療、両侯の病痛治療をめぐる初の解明は、今後の伝記・小説に大きな影響を及ぼす。

#### 8 赤湯御殿の活用

米沢藩・上杉家は赤湯温泉に大きな御殿を持っていた。どんな活用のされかたをしていたか、今後の調査に期待される。

#### 9 孤本『人舎利品』

従来知られている経文仕立ての蘭学作品は『苦多尼訶経』と『西説観象経』の2作だけであった。蘭学史としては医学内容の作品が植物学や理学書よりも、まず先に作られるべきでなかったか、という大槻玄幹の意気込みが感じられる。

その他にも注目すべき点が多い。例えば、当時の蘭方医師が常用していた片仮名表記の輸入薬が沢山見えている。今後の調査研究が俟たれる。

また、長年にわたって蘭方医師の治療の実際はどんなであったか、薬の使い方はどんなであったか、関心を持ってきたが、さっぱりわからないことであった。筆者が門外漢であったためなのか、それとも、この種のことは企業秘密に属することなのか。現代の名医からも、明快な回答は得られなかった。堀内家文書の解明のなかで知り得たことは医史学にとっても、蘭学史にとっても重大なことであったと認識している。それは、「この段階の蘭方医の治療・診療は、外科的なものは蘭方により、内科的（内服薬）は漢方によっている。」と知り得たことである。『米沢藩医 堀内家文書』の熟読・活用をのぞみたい。

### 参 考

- ・『米沢藩医 堀内家文書』米沢市医師会、2015年3月27日。
- ・『伝播する蘭学——江戸・長崎から東北へ——』片桐一男著、勉誠出版、2015年3月31日。

### 附記1

医学・薬学分野に門外漢の筆者が、堀内家文書の解読・注記・解説ができたことは長年にわたって諸賢から教示を得ることができたことによる。謝辞を書いたが、自治体の出版物にはそぐわない

との理由で、全て削除となった。そこで、堀内家文書によって解明できた諸点を中心としながらも、東北諸藩に伝播した蘭学・蘭方医学も収載して、急遽『伝播する蘭学——江戸・長崎から東北へ——』（勉誠出版）をまとめて、『米沢藩医 堀内家文書』（2015年3月27日刊）の4日後の2015年3月31日付で公刊、各位に対する謝辞を表明することができた次第。意のあるところを汲んで

いただき、せいぜいご活用いただけたら著者の喜びこれに過ぎるものはない。

## 附記2

『日本歴史』第818号（2016年7月号）に次の書評が掲載されている。矢森小映子「片桐一男著『伝播する蘭学——江戸・長崎から東北へ——』

（平成28年4月例会）

## 書 評

米田該典 著

### 『正倉院の香薬——材質調査から保存へ——』

東大寺の正倉院は奈良時代を中心とした多数の宝物が所蔵されていることで広く知られている。そのなかには当時の薬物も含まれており、かねてより、薬学の研究者を中心に注目されるところである。漢方の研究においては、古来どのような処方方が運用されてきたかを文献的に探究することは重要であるが、その際には漢方処方を構成する生薬がその当時は果たして如何なるものであったのかという問題に直面せざるを得ない。本草書を見ても現代流通している生薬とは明らかに性状の異なる記載があり、漢方処方方の運用の軌跡を現代に生かすには、当時用いられていた生薬を明らかにすることが肝要である。故に、正倉院に保存され長い年月を刻んできた薬物は、じかに生薬の利用状況を伝える貴重な資料なのである。

正倉院薬物の本格的な理化学調査は1948年の第1次調査と1994年の第2次調査があるが、本書は第2次調査に携わった著者が第1次調査と第2次調査で行われた理化学的調査についてはもちろん、文献的な考証や薬物以外の宝物に関する内容まで網羅しており、正倉院薬物の今日までの調査の詳細を伝える好著である。

本書の表題は、正倉院で行われた宝物の点検、調査を記録した「曝涼帳」にある記載に基づき「薬物」ではなく「香薬」の語を用いている。第

1章では「香薬とその調査」として正倉院宝物の概要、および「種々薬帳」、「曝涼帳」などから香薬の出入と管理について触れ、第1次、第2次調査の概要を述べられている。

第2章は「香と香材の調査」として沈香、全浅香と黄熟香、白檀、木香、丁香、薰陸、琥碧、合香、練り香といった香薬について具体的な調査内容を個別に述べている。個々の生薬に含まれる化学成分についての調査はもちろん、経年的な成分変化についても検証されている。また、香薬を利用するための香道具についても報告されている。

第3章では「薬物の調査」として麝香、犀角器、阿麻勒、奄麻羅、無食子、厚朴、桂心、人參、大黃、臍蜜、甘草、胡同律、没食子之属、草根木実数種、葉塵、防葵と狼毒、獸胆などについての調査内容が報告されている。ここでは理化学的調査の進歩により、第1次調査では得ることができなかった調査内容や、海外での豊富な生薬標本の収集とそれらとの比較により正倉院の薬物について検証されている。第2章、第3章には著者の長年の研究成果が反映されており、第1次調査を覆す調査内容も随所にみられ、本書の真骨頂といえよう。

第4章の前の附章では「ある蘭方医の薬箱に見る保存例」として緒方洪庵の薬箱、および収載薬物について述べられている。個々の薬物として